

出版

Publication

出版界は「商業経済」の常識を疑え 世界的ベストセラー『負債論』を読む

福嶋 聡

ふくしま あきら

ジュンク堂書店難波店店長。
1959年、兵庫県生まれ。京都大学文学部卒。82年、ジュンク堂書店入社。京都店、仙台店、池袋本店、大阪本店などを経て、2009年から現職。著書に『書店人のこころ』『劇場としての書店』『希望の書店論』紙の本は、滅びなご『書店と民主主義』など。

昨年11月に翻訳刊行された米国生まれの文化人類学者デヴィッド・グレーバーの『負債論 貨幣と暴力の5000年』（酒井隆史監訳、以文社）は圧倒的なスケールで五千年の人類史を渉猟する、「副期の本」である。

「副期の本」とは、常識を覆しながら、しかも多くの人を魅了し、オルタナティブ（今とは違う世界）の可能性を感じさせる本のことである。多くの本がそれに続き、書店の棚をドラスティックに変容させる。振り返れば『構造と力』（浅田彰、勁草書房、1983年）、「オリエンタ

リズム』（E・サイード、平凡社、1986年）、「帝国」（ネグリ・ハート、以文社、2003年）などが、それだった。

変容は、現実社会にも及ぶ。『負債論』の原著の刊行（2011年）は、世界中の評価を得て影響力を持ち、米国の「ウォールストリート占拠運動」をはじめとする反ネオリベリズムの動きを誘発したという。

スミスが「創作」した（そしてマルクスも依拠する）この「貨幣の創設」神話に、対応する実態は存在しない。物の交換である「商品経済」に先んじたのは、生きる上で相互に助け合うことが不可欠なことに起因する「人間経済」であったと説く。

次に、鑄造貨幣がまず誕生し、それを代替するものとして仮想通貨が生まれたとする貨幣史の「常識」も否定する。実際に先に登場したのは、「いつか借りて返す」という信用の証である仮想通貨だった。原初の文字の使用法が、そのことを裏付けて

いる。鑄貨先行説は出土物偏重の所産であるという。

この二つの「常識破り」を担保するのが、人間は生きるために他者を必要とするという根本的事実だ。「わたしたちは自己存在すべてを他者に負っている」のである。その結果、人びとが相互に負債を負い合う相互扶助のコミュニティが、自然と形成されていった。

物の交換は、（経済学の「常識」に反して）むしろそこに生まれた「信用経済」の相互扶助を揺るがしたのだ。さらにそれを破壊したのが、

鑄造貨幣の誕生だった。鑄造貨幣は、武器の購入や兵士への支払いのために創り出されたものだからである。鑄貨の誕生は、戦争の時代の幕開けと並行している。律法が禁じている友朋に対する利子の取り立ても、「敵」に対しては赦されるようになる。

鑄貨誕生の時代、直接民主主義が称揚される古代ギリシャや「パックス・ロマーナ」が謳われる古代ローマは、戦争に次ぐ戦争の時代であった。

ローマ帝国の滅亡を経て中世が始まると、鑄貨は修道院などの宗教施設に集中し（これは洋の東西を問わない）、再び仮想通貨が主役となる。ここでも「暗黒の中世」という西洋史の「常識」が、覆される。

再び鑄貨が主役の座に就くのは、大航海時代から植民地主義へと向かう、略奪と殺戮の近代である。ヨーロッパの権力者たちは鑄貨で略奪者たちを雇った。略奪の対象であったアメリカ大陸での膨大な金銀の発見は

鑄貨の増産を容易にし、略奪のスパイラルは亢進する。そこに住んでいた「敵」たちは、容赦なき殺戮の犠牲となった。

略奪のスパイラルは、財を持つものたちがそこに投資する強力なモチベーションを与え、「資本主義」が成立する。そして略奪の成果である奴隷制と共に、奴隷制と根を同じくする賃金労働もここに開始されたのである。

信用によって成り立つ「人間経済」と出版界

グレーバーは語る。

それゆえ、資本主義の起源の物語は、市場の非人格的力による伝統的共同体の段階的解体の物語ではないのである。それはむしろ、信用の経済がいかにして利益の経済に転換されたのかという物語であり、非人格的力—しばしば報復的な国家権力の侵入によってモラルのネットワークが段階的に変容させられていく物語なのだ。

そして現代。植民地が「解放」され、東西冷戦が「終焉」しても、略奪と殺戮の時代は続く。

国家間の力の格差は広がる一方である。攻撃の手はヨーロッパ内にも向けられ、「負債」の返済を迫られたギリシャは破綻、その波は他の国にも及びつつある。グレーバーは、「贖い／救済」とはもはやなにかを買戻すことではなく、計算（会計）システム総体を破壊することだ、という。

一方、IT化の進展によって、主役の座は、鑄貨から再び仮想通貨に移ろうとしているかに見える。だが、その根底にあるのは相互信頼、相互扶助の「人間経済」ではなく、暴力・戦争と共にある「商業経済」であり、それが生み出したのは（返済を強制される）負債の連鎖である。そのミスマッチこそが資本主義の破綻を招来することを予想させる。そしてその予想は、既に現実化している（2007年のリーマン・ショックなど）。

今、最も必要なのは、人間は「貸し借り」があつてはじめて生きられること、「社会」とはわたしたちの負債そのもの」であることの再認識ではないか？
そして現代を物差しとする近視眼的な見方を排して、「今とは違う世界」を構想することではないだろうか？

昨秋の、信山社・岩波ブックセンター（東京・神保町）閉店に思いが及ぶ。柴田信会長が2000年に経営を引き受けた時から、財務状況はよくなかったという。出版不況の中、それはどんどん悪化していき、86歳だった会長の急死と同時に、膨大な負債が明らかになった。「街の本屋」の灯台のような書店の存続は断念された。裏返して言えば、柴田の存在が、信用によって成り立つ「人間経済」をかうじて支えていたのである。
「借りたものは速やかに返さなければならぬ」という「商業経済」の「常識」が、ぼくたちから大切なものを奪い去って

いく。『負債論』が、日本でも
多くの人に読まれることを、心
から望む所以である。

■